

塩田千春 掌の鍵
辿られた記憶が再び辿りつく場所

中野仁詞

恋風の 身に蜷川 流れては
その虚貝 うつつなき
色の闇路を 照らせとて
夜毎に灯す 燈火は
四季の蛍よ 雨夜の星か
夏も花みる 梅田橋
近松門左衛門 曾根崎心中「天満屋の段」

この引用は、筆者と塩田千春が会うきっかけとなった《曾根崎心中》の一節である。わたしたちは2004年に初めて顔を合わせたのだが、当時、筆者はコンサート・ホールの舞台において、現代美術、現代音楽、日本の伝統芸術を関係させることでいかなる化合物としての舞台作品ができあがるのかを試みようとして、そのスタッフ、キャストを探していた。《曾根崎心中》では、題名の通り、「心中」を巡り「生」と「死」を問うような筋書きとなっているが、筆者はそこで、常に「死」と「生」をテーマに作品を制作する塩田千春に、舞台作品を構成する大きな要素の一つである舞台美術を依頼するに至ったのである。彼女は2001年に開催された横浜トリエンナーレで、泥が付着した巨大なドレスによる《皮膚からの記憶》を発表し、日本での衝撃的なデビューを飾っていた。彼女の出身地は偶然にも、文楽が発祥した大阪であり、それもまた筆者と彼女を結ぶ一つの縁であったのだろう。《曾根崎心中》を元にしたこの試み自体は、台本作者、文楽の構成演出などスタッフが決まりつつあったものの、諸事情により実現には至らなかった。しかしこのことがきっかけとなり、その後2007年に神奈川県民ホールギャラリーにて、「沈黙から」と題した、彼女にとってそれまでにはない最大規模の展覧会が実現した。塩田千春と筆者はこの機会に再会を果たしたのだが、筆者はここで《沈黙》(2007年)や《光から》(2007年)等の作品から、極めてスリリングな経験をする事となった。このテキストは、言ってみれば、筆者が塩田千春の作品から受けるこのスリリングな経験を、ヴェネチア・ビエンナーレ展示作品《掌の鍵》においてできるかぎり詳細に言語化する試みである。

*

塩田千春は、凜として、先鋭かつ温かな視点をもって展示空間の全容を把握し、空間そのものを作品として大きく変容させるため様々なマテリアルを選定する。これまで彼女は、ドレス、ベッド、靴や旅行鞆など、日常生活のなかで人が使用した痕跡と記憶を内包するマテリアルを用い、作品を制作してきた。彼女が空間を構成しつつ完成させたその作品は、言葉や文化的歴史的背景、政治・社会状況の違いを越えて、世界各国の鑑賞者に感動を与え、日本、欧米、中東、オセアニア、そしてアジア諸国など、神奈川県民ホールギャラリーの展示を含めこれまで約200の展覧会で紹介された。その作品をわれわれが体感する時、われわれがもつ内的世界を貫通する程の衝撃を受けるだろう。彼女の作品の美しさ、新鮮さ、瑞々しさ、力強さは、われわれの心と身体に静かに、力強く浸透して行く。構成された展示空間に身体を置くことで、直接的に体感するインスタレーションという表現の強みを、塩田千春は「瞬間の哲学」と呼ぶ。ヴェネチア・ビエンナーレにおいて昨今特に目新しい展示形式ではなくなった大規模インスタレーションにおいて、なお彼女の作品をわれわれが新鮮に感じるのはこの「瞬間の哲学」において、「生」と「死」の問いが投げかけられるからだ。

今回の第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館で、塩田千春は《掌の鍵》と題した新作インスタレーションを展示する。

《掌の鍵》は、2階の展示室とその真下にある1階の野外ピロティにそれぞれ異なるマテリアルや手法を使用した展示を行い、二つの要素をもって一つの作品とした。2階展示室は、人が使用した大量の鍵、赤い糸、2艘の古い木製の舟を使用したインスタレーションとなっており、一方で1階の野外ピロティには、生まれる前、生まれた時の記憶を語る子どもの映像と、鍵をもった子どもの掌の写真が展示されている。

2階の展示室に入ると、われわれはまず、入口に向かい触先が持ち上げられた古い舟と、縦横約15m、高さ約5mの大きさを持つ展示空間を埋め尽くすほどの夥しい量の赤い糸を目にすることになる。天井から垂れる赤い糸の先にはそれぞれ多種多様な鍵が結ばれている。その光景はさながら、空から大量の鍵の雨が降り注ぐ赤い嵐のようである。部屋の中に進むと、触先の持ち上げられた舟の奥に、もう一隻の舟が、やはり赤い糸に覆われ鎮座しているところをわれわれは目にする。入口に置かれた舟とは違い、床面と平行に設置されているが、この2艘の舟の配置は、赤い雨が降り注ぐ嵐の中、波に揉まれながら大海を航行している光景をわれわれに想起させるだろう。その古い舟だけを見ると、現役を退き長い人生の果てに最期の残された時間を

大切に過ごす老人のようでもあるが、触先を持ち上げられた舟からは、吹きすさぶ赤い嵐の中を堂々と突き進むかのような力強さを感じるし、鑑賞者はその威圧感に圧倒されるだろう。

1階の野外ピロティに降りてみよう。そこには縦3.5メートル、横4メートル、奥行き3メートルの大きさを持つ直方体型の箱が設置され、その側面に展示された作品を観ることになる。そのうち一つの面には、鍵を乗せた子どもの掌の写真が1枚(展示されている。反対側には、塩田千春がベルリンの幼稚園を巡り園児に取材し撮影した映像がモニターで上映されている。その映像には、園児たちが自分の生まれる前と生まれた直後の記憶を語る様子が映しだされている。ようやく言葉をはしゃぐ年齢に達した子どもたちが語るこの世の原初の記憶は、時に明確で、時に空想に満ちた物語のようなものでもある。

この瑞々しく語られる子どもたちの記憶を聞くと、それは悠久の歴史を刻みながら彼らに受け継がれてきた人類の記憶なのだと感じざるを得ない。この人類の記憶を開いたのは、他でもない、塩田千春の問いかけであるのだ。子どもたちはきっとその問いによって、自らが受け渡されたその記憶の鍵の存在に気付いたのだろう。小さな掌に乗せられた鍵。その鍵は、祖父、祖母、両親の思い出、あるいは、脈々と受け継がれてきた先人たちの記憶を開くものであったのだ。しかし、左右の手を合わせ受皿となった掌には、われわれの祖先の膨大な記憶を受け止めるには些か小さい。子どもたちその小さな掌が受け止めるには、鍵一つで精いっぱいであろう。鍵を託された子どもたちを待ちうけているのは、2階展示室にある赤く強い風が吹き、さらに記憶の奥に進めと言わんばかりに膨大な鍵、すなわち記憶が降り注ぐ世界なのだ。その時、子どもたちが持つものといえば、その世界を航行する舟となる言葉であるが、ようやく覚えたばかりの発話の作法はその海を航行するための操舵の技としては頼りない。その使い古された年期物の舟は、しかし、数多の先人たちの手により作られ、受け継がれ、幾多の嵐を乗り越えてきたものである。この舟はまさに、受け継がれていくわれわれの記憶を、幾多の苦難を乗り越え、うまく行くようにと願う旅の先人たちからの贈り物だ。2艘の舟は、天から注ぐ無数の鍵＝記憶を目一杯浴び、無数の赤い糸＝記憶の奔流を受け流しながらも、ゆっくりと静かに、そして力強く記憶の海を航行し、子どもたちを導いていくのである。

その舟に導かれた末に、人類の記憶の淵源から発せられた子どもたちの言葉は、果たして生者の言葉なのか、死者の言葉なのか。筆者はいつしか、「生」と「死」の境界に対峙していた。

古今東西にある、鍵を扱った様々な作品を参照すると、鍵を持つことは、それだけで権威を示したり、また所有権や力、富などを持つことを意味すると同時に、鍵を持ったものにそれを使用するかどうかという主体的な選択を迫るものであることがわかる。サン・ピエトロ寺院のシステリーナ礼拝堂の壁に描かれたミケランジェロの《最後の審判》や、ダンテの『新曲』にも描かれるペテロの鍵や、真言宗の開祖空海による『秘蔵宝鑰』(ルビ:ひぞうほうやく)に登場する「鑰」がそれに当たる。この二つの例と同様、《掌の鍵》で受け渡された鍵を用いるか否かは、子どもたち自身の選択によるものであり、彼らは鍵を受けると同時にその問いに直面することになるのだ。

しかし、ここで作品の鑑賞者であるわれわれもまた、実のところ同じように問われる立場にあるのだということに気づくことになる。投げかけられた選択を受け入れ、映像内で根源の記憶を語る子どもたちの言葉は、われわれ鑑賞者を「生」と「死」の境界へと誘うが、ここでわれわれは、ある選択をその言葉から求められることとなる。その選択とは、彼らの語る、生者のものとも死者のものとも知れぬその言葉を受け入れるか否か、である。子どもたちの語る「生」と「死」に迫る言葉に触れることで、われわれ自身もまた知らぬうちに、生死の臨界に迫ることになるのである。嵐のようにも見える赤い糸と鍵の展示空間に飛び込むことになるのは、子どもたちのみならず、われわれ鑑賞者でもあるのだ。

子どもたちの言葉から選択することを促されたわれわれは、この嵐の中、果たして何に直面することになるのだろうか。それは、われわれの気質である。われわれは原初の記憶であるその鍵の嵐の中で、どういった舵取りをするのか、何を指すのか。この選択は、われわれがわれわれ自身であるとはどういうことかという、自らのアイデンティティを問うものであるのだ。

*

われわれは、パスワード、キーマン、キーワード、など、鍵にまつわる言語を日常的に使い、また合言葉から呪文、暗号に至るまで、様々な場面で鍵という概念に触れている。そして家の玄関やオフィスの扉を金属、カード、あるいは指紋という様々な形体の「鍵」なる名を持つものを日々使用している。あまりに身近であるので気づきにくいだが、これらの鍵、とは、いずれも敷居を跨ぐことと関係している。敷居は、門の内と外を区切るだけでなく、敷居そのものが異界化されていると古今東西様々な言い伝えがある程の特異点でもある。鍵は、特異点たる敷居を形成する重要な道具であり、同時にその敷居を開き、跨がせるという儀式を要求するものでもある。彼女の作品からは常に、このような「生」と「死」との狭間にある領域を見てとってしまう。

塩田千春がテーマとする人間の「生」と「死」。近年、彼女は自らが経験することとなった大切な人の死に導かれて、あらためて「生」と「死」という、普遍的でありながらも個々人が個別に経験するしかないわれわれの宿命に出会うこととなった。しかし、その辛さから彼女は目を背けず、その体感や感情を浄化、昇華して作品

にする。今回、マテリアルとして選ばれた鍵は、上述したように、日常生活のなかで最も身近に使用される道具の一つであると同時に、のっぴきならない「生」と「死」の交換にも迫りうるマテリアルである。鍵は一方で、家屋、財産、家族など身近で大切なものを日常的に守り、常に人間の手の暖かい温もりに包まれて使用され、大切なものとして扱われ、幾多の記憶が積み重なってゆくものである。そしていつか、大切な鍵は大切な人へと託される。しかし鍵には、こうした一見温かだと思える側面がある一方で、それを受け取る子らにとっては、年齢ともなう無知さがゆえに限りなく不穏なものにも思えるものであろう。

《掌の鍵》において、塩田千春によって鍵の存在を知らされた子どもたちがその鍵を使って人類の記憶の扉を開く際、彼らは一体何を思ったのだろうか。初めて発するその言葉は、彼らが見たもの感じたものをそのままに語るものとなっているのか。自らの中にいないはずの存在。それが声を発することの不気味さは、すべてが無化された後に発せられる「生の証」たる言葉が、紛れもなく子どもたちのものであるにもかかわらず、聞いているうちにそれを誰が語っているのかわからなくなってくること、そしてその「生」が一体誰のものなのかわからなくなってくること、そこに起因するものなのだ。その不穏さに触れることはまた、人としての根源と、自らのアイデンティティの聞き合いに直面することでもある。そしてわれわれが、作品を体験することにおいてその「生」の揺らぎと対峙することは、塩田が常に向き合う「生」と「死」を見つめることにもなるのである。

最後に、このような塩田千春の作品にわれわれが接した際、あるいは接した後、どう振舞えばよいのかを、《掌の鍵》に即して考えてみるのもよいだろう。日常を生きるわれわれにとって、普段は目を瞑っているものであるから、気質やアイデンティティ、さらに「生」と「死」を考えるには注意が必要だ。特に、あることを選択する、という行為には注意しなければならない。下手をすれば、自分自身を、そして「生」と「死」の境界をも見失ってしまいかねない。これは、われわれのアイデンティティなるものの形成のされ方にもよる。つまり、自分自身に固有のものであり、既に予め備わっているものだと思うれがちであるアイデンティティとは、実は問いかけに対してわれわれが応じることによってその度ごとに形成されるものであるのだ。そしてそれに導かれて死生観をもが形成される。《掌の鍵》において、われわれが子どもたちの言葉をもって直面したものはつまり、彼らが自らの言葉を用いアイデンティティを徐々に構築していくプロセスそのものに他ならない。問いを与えられる者は、それが真に迫っている本質的な問いであればあるほど、その答えにおいてまた真に迫って問い返すのだ。塩田千春の問いかけは、まさに子どもたちにとって真に迫る問いであり、だからこそ選択を迫る鍵であったのであり、また同時にわれわれへの問いでもあったのだ。しかし、選択を迫られた者は、問いそのものを注意深く考えなければ、託された鍵がもつ威力に押され、単に選択の場を与えられただけという空虚な機会としか捉えられず、本当に選んだものの真価の判断を見極められないであろう。ここでわれわれが対峙しているのは、子どもたちのかわいらしい言葉ではない。それは、根源の記憶とも言える2艘の舟が進む真っ赤な嵐の中で、まだ馴染まない舟を操舵し航行するために、必死に紡がれようとする言葉なのだ。

《掌の鍵》において、鍵はどのように子どもたちに託されたのか、その鍵は、何を問うているのか、なぜわれわれは、自らも問われていると意識したのか……。それらを能動的に問い、そのプロセスを仔細に追い、自ら言語化することは極めて大切である。われわれにとっての本当の鍵とは、子どもたちからただどしくも明るく楽しそうに語られる言葉そのものではなく、その紡がれ方なのだ。そして、さらにわれわれが刮目すべきは、親から子へ鍵が託される一見温和な光景ではなく、子どもたちが鍵を自らの掌でしっかりと受け止める行為そのものなのである。

(第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館キュレーター)